

タイトル:「奈落の底から見上げた明日」(全・261ページ)

出版社:日本写真企画

発行:2021年11月29日(初版第一刷)



著者紹介:照ノ富士 春雄(テルノフジ ハルオ)、第73代横綱。1991年11月29日生まれ。モンゴル・ウランバートル市出身。2010年に鳥取城北高校入学、2011年に間垣部屋に入門。2013年、伊勢ヶ濱部屋に移籍。2015年、平成生まれ初の大関に。その後、ケガや病気で序二段まで番付を落とすも、見事復活。2021年、令和初の横綱に昇進。本名は杉野森正山。

内容:2015年に大関に昇進するも度重なるけが、さらには内臓疾患により余命宣告されるほどの病により、序二段まで7段の降格。そして引退を覚悟しながらも覚悟を決めて上を目指し8段昇格し、横綱までに昇りつめた「七転び八起き」の相撲人生を自ら振り返る。

目次

プロローグ

○最初に大関になった私の周りには、たくさんの方が集まってきた。大きなお金も知名度も手にした自分は、どこに行っても、ちやはやしてもらえた。もともとお酒を飲むのが好きで、親方の目を盗んでまで、夜の街に繰り出していた。でも、稽古はよくしていた。そして「この強い体に、お酒なんか勝てるもんか」、と当時本当にそう思っていた。これは、照ノ富士がこれまで歩んできた、波乱万丈な相撲人生の物語である。

1、モンゴルで生まれ育つー「お母さんに厳しくも優しく育ててもらい 運動も勉強もできた」

○ダルハンというウランバートルに次ぐ都市で生まれ、今でも親戚が住んでいる。家族は、姉と妹がおり、男子は1人。勉強も運動もでき、飛び級を2回し、17歳でモンゴルの大学に入学。大学では柔道ばかりの一年で、その後日本へ。

○母からは、「一つの事に集中して、徹底的にやりなさい」、「発言には気をつけなさい」と教わった。後者の意味するところは、特にネガティブな場合、本当にダメになってしまうから。

2、16歳でスケート場を経営—「自分で責任を負うことの大切さを身に染みて理解できた」

○両親がホテルやレストランを経営していた環境もあり、経営に関心があり、16歳でスケート場経営のための土地、資金の確保、スケート場作りまで自分達で行い、経営に成功し、16歳以降、親にはお金を一切もらわずに生活していた。

3、体が大きいからって有利じゃない—「最初から大きかったとしても 努力しなければ強くはなれない」

○大きい人も小さい人も、それぞれの努力が必要で、スタートラインは、皆一緒。

4、18歳で日本に行くチャンスを手に入れた—「負けたことで初めて悔しいという気持ちを知るようになった」

○ムンフバトさん(白鵬の父親)に気に入られ、15歳で初めて日本へ。その時は受け入れてくれる相撲部屋が見つからず、相撲へのモチベーションは上がったが、一週間ほどで帰国。

○帰国後は相撲部屋が見つからない事も想定し、黙々と勉強に励む。大学での一年間は、柔道、モンゴル相撲をやったが、必ずしも順調な実績ではなかった。しかし大相撲への意欲は強く、18歳になった時、白鵬が鳥取城北高校に話をつけてくれ、高校一年生として入学した。

5、鳥取城北高校に入学—「どんなにきつくても 人に弱音を吐くことはなかった」

○2010年3月に4人入学し(逸ノ城、水戸龍らと)、厳しい稽古により沖繩開催のインターハイでは個人としては全勝し(高校横綱)、鳥取城北高の団体優勝に貢献した。

6、たった8ヶ月の高校生活—「高校時代の仲間はいまも大切な財産となっている」

○日本語はとにかく色々な人に聞いて覚えていった。しかし、唯一カレーライスだけは嫌いだった。白鵬が間垣部屋の入門を見つけてくれ、8ヶ月の高校生活の幕を閉じた。

7、間垣部屋から伊勢ヶ濱部屋へ—「もっと強くなりたいと願った瞬間 自分からやる稽古が変わっていった」

○入門した間垣部屋は小所帯だったが、幕下上位まではトントン拍子だった。そこで伸び悩んでいた頃、伊勢ヶ濱部屋に移籍となり、稽古が厳しくなり、自分からやる稽古が変わり、その結果、移籍後2場所で関取になった。新十両で十両優勝を、十両3場所目で新入幕を決めた。

8、初めての横綱戦で掴んだ手応え—「頑張れば、いつか勝てると強く感じるようになった」

○一番印象に残っている一番は、初の横綱挑戦となった横綱・鶴竜との対戦だった。負けたけれど、雲の上の存在だった横綱に、いつかは勝てるかもしれないと感じた。横綱にも勝つという気持ちで、日々稽古を積んでいた。

9、優勝できたのは一人の力じゃない—「最高の仲間にもまれて みんなで頑張ることが嬉しかった」

○相撲はどこまでも個人競技だが、土俵に上がるまでの過程では、仲間がどれだけ自分を支えてくれているのか。

10、相撲人生における転落のきっかけ—「大ケガを負っても負ける気がせず 相撲を取り続けることを選んだ」

○新三役から2場所で大関に昇進し、先ず左膝を、次いで右膝を負傷、ならば上半身で相撲をとし、結果右鎖骨を骨折した。2016年、17年は、だましだまし土俵に上がり続けた2年となった。

11、あの琴奨菊戦の真実—「目の前の白星のために 必死にやったこと、だが謝りたい」

○力士はみんな目の前の白星のために、必死にその時々「最善」を考え、選択しながら相撲を取っている。

12、相撲より病気に勝たないといけない日々—「医師からの宣告に『死』を意識した」

○度重なる膝のケガの後、重度の糖尿病が発症し、加えて腎臓結石、C型肝炎も患い、内臓はボロボロだった。番付を落とした原因は、ケガではなくこれらの「重い内臓疾患」だった。

13、闘病生活は奥さんの支えがすべてだった—「男として終わったと思ったけれど 当たり前のように付いてきてくれた」

○闘病生活は、一年以上を要した。189kgの体重が162kgまで落ちた。

○入院中、一番嫌だったのは、奥さんに毎日情けない姿を見せ続けていることだった。それにしても、彼女は実に肝の据わった女性だ。その姿を見ると、自分も覚悟して、真剣に病気とケガに向きあわなくてはと思えた。

○先生に指示された食事制限を徹底的に守り、彼女の献身的な支えがあり、内臓も改善し、両ひざの手術も無事に終わり、あとは相撲を辞める事だけだった。彼女からは、「私が働くから心配しないで」と。残るは、親方の説得だけだった。

14、中途半端な自分が嫌で家出した—「自分と向き合うために一人になって心の葛藤と対話をする」

○退院後3週間で少し歩けるようになったが、何もやる気は起こらない。一人で考えたかったので、家出をし、ビジネスホテルに泊まった。しんと静まり返った部屋の中、一人で自問自答を繰り返した。なにより胸が痛んだのは、幸せにするからといってお嫁に貰った奥さんを、幸せにできない事だった。もちろん、親も幸せにできない。

○「自分との対話」と「心の葛藤」は、次の日の夜まで続いた。考え抜いた結果、「どうせ親方が辞めさせてくれないなら・・・」「一回、死んでもいいからやってみよう」「やるなら徹底的にやろう」と大きな覚悟を決め、家に帰った。

15、人が離れていって見えてきたもの—「何かあってもすべて自分の責任 誰のせいでもない」

○知りあいの社長から「いざ、やりだしたら、『頑張っているな』って思う人のほうが多いよ」と言われ、いらぬプライドから離れる一つのきっかけになった。覚悟を決めた翌日に、まずこの一年間で全力で体力作りに励もうと専属トレーナーをモンゴルから呼び寄せた。

○トレーナーをはじめ50～60人の方たちの頑張りで、私の活躍は成り立っている、そんな気持ちを胸に刻んだ。

○今、コロナの影響で、たくさんの人や会社が苦しい思いをしている、でもその中で、いま本当の仲間を見つけるチャンスでもあるはずだ。

○「何が起きても、それはすべて自分の責任」

「これからは、そう考えていきなさい」

「そうやって人間は大きくなっていくから、」

今、まさに大変な思いをしている人にも、親方のこの言葉を信じ、そう考えていてほしい。

16、プラスへの転換が生き方を変える—「周囲に感謝し、自分に正直になることで気持ちが前向きになる」

○日本の社会に出たことのない私が、偉そうに話す事ではないけれど、自分の経験を話す。

<1>今の自分を受け入れて、現状どこまで落ちているのかと把握する。

<2>これから何をしたら乗り越えられるか考える。

<3>そのためにどんな努力をしたらいいかを考える。

○人はだれでも、嫌な気持ちになることやイライラすることがあるが、そういう時は信頼できる人に、一人でも良いから、話す。私も、一度下に落ちてからは、実際には結構負けている。ただ、いつの時も、目標を明確に立てて、順番にクリアしていった。今、つらい状況下にいる皆さんも、「周囲に感謝し」「自分に正直になる」を信じて、実践してほしい。

17、メンタルにもたらした好影響—「1日24時間近くを相撲に費やせるようになった」

○膝と糖尿病の為に、「幹細胞治療」の手術も受け、5時間ほどで終わり、痛みもなく翌日から普通に生活ができた。

○「土俵のケガは稽古場で治せ」は、ケガをしたら、鍛えて筋肉をつけて、より強い体づくりに励めという事なのだ。

○本気でトレーニングをしようと心を入れ替え、人を雇ったり病院に通ったりしたことで、当たり前だがかなり出費がかさんだ。非常に心苦しかったが、お母さんの家を売ったり、モンゴルにある両親の会社から崩したりして、お金をやりくりさせてもらった。それを機に、お金のこともすぐ考えるようになった。今まで、どれだけ無駄な出費をしてきたんだろう。

○昔、若天狼さんから言われた事を今もとても大事にしている。それは、「番付が上がると偉そうにする奴がいる。だけど、それは相撲で強くなっているだけで、偉くなったわけではない。勘違いする人が多いから、気を付けなさい」と。自分でできる事は自分です。してもらう事には心から感謝する。それを忘れては終わりだなと思う。

18、生まれて初めて感じた緊張—「自分を応援してくれる人のためにも再起を誓う」

○もともと緊張とは無縁の男だったが、約1年ぶりの復帰の時、生まれて初めての緊張を感じた。「これだけ稽古して、これだけやっているんだから、この目の前の一番がなんだっていうの？」と思った。これが最初で最後の緊張だった。

19、復活の幕尻優勝と大関返り咲き—「優勝しても喜びより安堵の気持ちのほうが強かった」

○必ずしも順風満帆ではなかったが、それでも2019年11場所で幕下優勝し、翌場所に11年半ぶりに関取復帰を叶えた。生活改善とトレーニングの成果で体調は快方に向かい、「7月場所での幕内優勝」の具体的な復帰プランを立てた。

○しかし、2020年2月からのコロナ対策が始まり、無観客開催、場所の中止、名古屋場所の東京開催、などもあったが、宣言通り7月場所の復活優勝を果たした。その後順調に番付を上げ、とうとう3年半ぶりに大関復帰を果たした。

20、いま振り返る自分の生き方—「相撲で絶対負けないという信念が変わることがない」

○過去から(若い時から)変わるの考えただけで、「相撲で絶対負けない」という信念は変わることはない。

○5月場所の千秋楽、優勝決定戦で貴景勝に勝って優勝を決めたが、貴景勝は、その後、「おめでとうございます」と。貴景勝は、突き押しでは番付を上げられないと言われ続けながら、その強い精神力で大関にまで上がってきた男。

○若い頃、稽古場で、横綱に対しても、臆せず果敢に向かっていったのは、高安と自分だけ。高安も腰などの大きなケガを乗り越えている。本来の彼の強さを知っているから、負けたくない気持ちと同じくらい頑張ってもらいたいと思っている。

21、ついには横綱への昇進—「横綱になって自然と責任感について考えるようになった」

○昔から、横綱を目指して取り組んできた。大関復帰後の伝達式でも「更に上を目指して精進致します」と述べた。

○横綱の品格とは、その人の生き様であり、全ての人に理解されるものではない。人によっては、勝つことが品格かも知れない。白鵬を叩く人もいるが、逆に勝負師として、勝つことの大切さを学んでいる人もいるわけだから。

○物事、なんでも始まりは大事だけれど、終わりはもっと重要だ。私の相撲人生も始まりは良かったが、途中で色々な事があり、だからこそ終わりはもっと大切だと思っている。死にもの狂いで35歳くらいまで横綱でいたいと考えているが。

22、これから私がやりたいこと—「もっと多くの人たちに相撲を好きになってほしい」

○私は、とにかく、角界を盛り上げ、ひいては力士という存在価値をもっと高めたいのだ。従来の相撲ファンだけでなく、広く一般の人々にも、相撲の魅力や力士のカッコ良さを知ってもらいたい。そんな私はやはり、現役を引退したら、親方になって協会に残り、また「フィーバー」を巻き起こすほどの人気力士を育て、相撲界をさらに盛り上げたいという思いがある。そのためには、日本国籍を取得する必要があった。

○横綱としていまは、ただただ土俵の充実のために、そして今後は、相撲界発展のため、モンゴルと、育ての国・日本の架け橋になるために、日々を大切に過ごしていきたいと思っている。

13 人が証言する横綱・照ノ富士(掲載順)

1、母・オコンエルデネさんが語る「息子」照ノ富士 —「これからも正しく生きていってほしい」

○ガナ(照ノ富士)には、「一人の力士として大成するだけでなく、一人の人間として、人を助けたり優しく寄り添ったりできる人になってほしいな」と願っています。

2、鳥取城北高校相撲部・石浦外喜義監督が語る「教え子」照ノ富士 —「『絶対に負けない』強い気持ちがチームメイトを勇気づけた」

○印象的だったのは、とにかく相撲部以外の子たちとも仲良くしていたことです。彼は大変賢く、実業界など勉強の面でも成功したかもしれないです。

○又、角界入りして伸び悩んだ時期もありましたが、稽古が厳しい伊勢ヶ濱部屋への移動が良いきっかけになりました。

3、元若天狼・上河啓介さんが語る「弟弟子」照ノ富士 —「経験を糧にしていける賢い人間であり、いい男である」

○入門したての頃、「強くなっても偉くなったと勘違いしちゃダメだよ」と伝えました。

4、日本の父・山田春雄さんが語る「息子」照ノ富士春雄 —「日本の縁起物に守られるように——化粧まわしに託す願い」

○伊勢ヶ濱親方は、部屋に移動して来た「若三勝」(当時は幕下)を、部屋の歴代の横綱の四股名を合わせて「照ノ富士」に変えた時、私の名前「春雄」を貸してほしと頼んできた。

○照ノ富士から直接要請されたのでこの取材は受けたが、今まで取材は全て断っている。何かを求めて後援会をやるなら、やらないほうがいいと、私は考えている。この本は、横綱昇進記念であり、「座右の本」になるといいですね。

5、元付け人駿馬・中板秀二さんが語る「弟弟子」照ノ富士 —「多角的な相撲勘 横綱の一番近くで感じていたこと」

○序二段から「再出場する」との電話をもらった時は、本当に嬉しかったですね。

6、元関脇 安美錦・安治川親方が語る「弟弟子」照ノ富士 —「彼の長けている素直さが 強さに繋がっている」

○番付を落としていったときは、ケガだけでなく内臓疾患もヒドイと知っていたので、かける言葉もありませんでした。

○でも序二段から復帰となり、「おう、序二段！」と冗談が言えるようになりました。みんな部屋にいる時は、地位でなく、「照ノ富士」個人として接していましたよ。

○私の断髪式がだいぶ延びて 2022 年 5 月に。断髪式で土俵入りをしてもらいたいので、それまでは引退するなよと念を押してあります。

7、妻・ツェグメド・ドルジハンドさんが語る「夫」照ノ富士 —「土俵上の夫はまるで別人 支えていくという強い思い」

○日本の大学にいた姉の影響で、15歳で日本の高校に留学。私の従兄の旭天鵬(当時)のいた大島部屋にホームステイをしていて、ガナ(夫)と出会う。大関に上がった時、ガナは23歳、私は20歳、お互い多忙な日々を送っていました。

○ケガと病気で落ちた時、私が支えるから大丈夫という強い思いがありました。

○今、私たちが楽しみにしていることは、子供が出来たら、子供を元気に育てていくことです。夫に対しては、ケガをしないで、一日でも長く相撲を取ってほしいなと思っています。

8、プロレスラー・浜 亮太さんが語る「仲間」照ノ富士―「みんなの記憶に残る力士になってほしい」

○彼はこの困難を乗り越えて、本当に自立しました。立ち居振る舞いが全然違います。でも僕らとは変わりませんが。

9、呼出し・照矢さんが語る「横綱」照ノ富士―「ルーティンの最後は『ケガに気を付けて頑張る』」

○最初から、将来強くなってなる子だと思ったので、駿馬と共に口うるさく言っていたので、最初は2人して嫌われていました。今はなんでも相談できる近しいお兄さんのように思ってくれているなら、うれしいですね。

10、常盤山部屋・貴景勝関が語る「先輩」照ノ富士―「大関が横綱を語るのは失礼なこと だからこそ一生懸命に横綱を目指したい」

○横綱のように身長の高い人が、しっかりとひざを曲げられるのは理想ですし、さすが横綱だなと感じます。

○番付を落とした時、横綱にしか見えない景色が必ずあるはずですから、自分が語れることは何もありません。

11、田子ノ浦部屋・高安関が語る「ライバル」照ノ富士―「同時期に一緒に相撲を取れたことは僕の相撲人生の糧」

○彼が最初に幕内に上がってきて、良く稽古をしました。二人とも若手だったので、負けたくないという一心でした。

○彼には日馬富士、僕には稀勢の里がいて、自分たちも注目されたい一心だったし、俺たちも一緒に肩を並べるんだという気概だったと思います。その後、僕は度重なるケガで幕内下位にまで落ち、かたや彼は番付を戻してきて、数年ぶりに対戦があり、感慨深い取り組みでした。やはり、挫折というものは、経験した人にしかわからないことですから。

○横綱の相撲は最初の大関時代とは全然違い、パワーアップして、厳しく、スキがない力強い安定感のある相撲です。

12、伊勢ヶ濱親方が語る「弟子」照ノ富士―「頑張る姿を見せるのは価値ある立派なこと」

○移籍してきて、今までとは質も量も違う稽古を経て、彼には横綱になる資質があると見ていました。しかし、ケガをしやすい相撲だったので、最初の大関時代からそのまま横綱に上がっていずれケガするのか、もしくはケガで一度落ちて、又上がってきて横綱になるのか。2つにひとつだと、最初から思っていました。

○ケガをしないと、相撲は変わりません。一回ケガを経験したら、よりいい相撲が取れるんじゃないかと思っていたんですが、予想以上に大ケガをしてしまった。表面的なケガとは違い、内臓の「ケガ」は、目に見えないので、いつ治るのか、よくなっているのかわかりません。目安が無いので、本人にしてみれば辞めたくもなるでしょう。それで「辞めてもいいけど、まず内臓を治さないと普通の生活もままならないから、相撲協会にいる間に治して、それからその後を考えよう」と。

○ともかく、本人は辞めたいと何回も言って来ましたが、ケガや病気で辞めると、治った時に後悔しますので、もし辞めると二度と力士にはなれないと言い、「もう少し」という思いでとどまってもらいました。

○大関になった人間が、序二段で相撲を取ることで、気が引けるし、恥ずかしかったと思います。でも、本人には、「落ちたのはケガと病気で、弱くなった訳ではない」と強調していました。あの時は、ともかく辞めずに続けさせることが最優先でした。三段目の時に少し負けて、本人は辞めたいと言って来ましたが、その都度、騙しだまし「まあもう少しやってみなさい」のような感じでした。

○幕下、十両、に上がって来て、だいぶ自信を取り戻して来たので、「そんなに簡単には行かないよ」と釘を刺していましたが、幕尻で優勝し、すごい事だなと思いました。

○ケガをしたことで、理にかなった相撲にかわり、ついに横綱に。部屋から横綱を二人出すのは殆ど無いことなので、弟子に恵まれたと思っています。

○今後は、口上の通り、「品確と力量の向上に」努めて頑張っていけばよいのではないのでしょうか。

13、伊勢ヶ濱部屋おかみ・杉野森淳子さんが語る「息子」照ノ富士―「彼を一言でいうなら『覚悟の人』」

○絶頂期から地の底まで落とされましたが、地獄が地獄で終わってしまわなかったのは、「奥様」と「主人」が本当に親身になっていたから。大きな支えは、二人の他にはいなかったのではないのでしょうか。

○大変な地獄もありましたが、そこでこそ見えるものもあるということ、若いながらに自覚したのです。そういった経験が相撲人生に生かされて、いまがあるんじゃないかなと思います。

○伝達式の口上は、本人と私たち夫婦とで、品格と力量、不動心を決めました。

○それと、やはり奥様がものすごく支えてくれていました。何かあると、「親方の言うことを信じていなさいよ」と言ってくれていたそうです。本当によきパートナーとよき師匠に恵まれて、彼の今があると言えます。

○とにかく彼は、本当に努力しています。それは、想像を絶する努力です。なにより、自分で自分の相撲人生はもう長くはないと言い切ってしまう、その覚悟は並々ならぬものがあります。

○未来はどうなるかわかりません。1日でも長く、横綱として頑張りたいと見守っています。

エピローグ

○横綱として本場所を経験して、いままでと変わったことがある。(1)自分のなかの意識。これまでは強くなりたい一心で稽古もトレーニングもやってきた。今は、横綱にふさわしいだろうか、常に不安がつきまとう。「もうこれで大丈夫」と思ってしまうてはいけない立場なのだと、身に染みて感じている。(2)場所を乗り切った後の体の疲れが2倍になった。土俵入りだけでなく、精神的なことも含めての疲労感だろう。

○過去はもう振り返らない。目の前の道をこれまで通り一步一步進んでいだけだ。まだその道を歩き出したばかり。私はまた一步、この足を前に踏み出してゆく。

あとがき

○いま色々なことをご苦労なさっている方々も含め、いろいろな人にこの本を届けたい。

○私は普段、マスコミに対して、あまり口数が多くありません。それは、その時々で自分の心境を正確に言葉にできる自信がないからです。だからこそ、この本のなかでは、しっかりと自分の本心を伝えたかったのです。自分の名で、責任をもって綴れたからこそ、私にとってもかけがえのない一冊となりました。

以上